

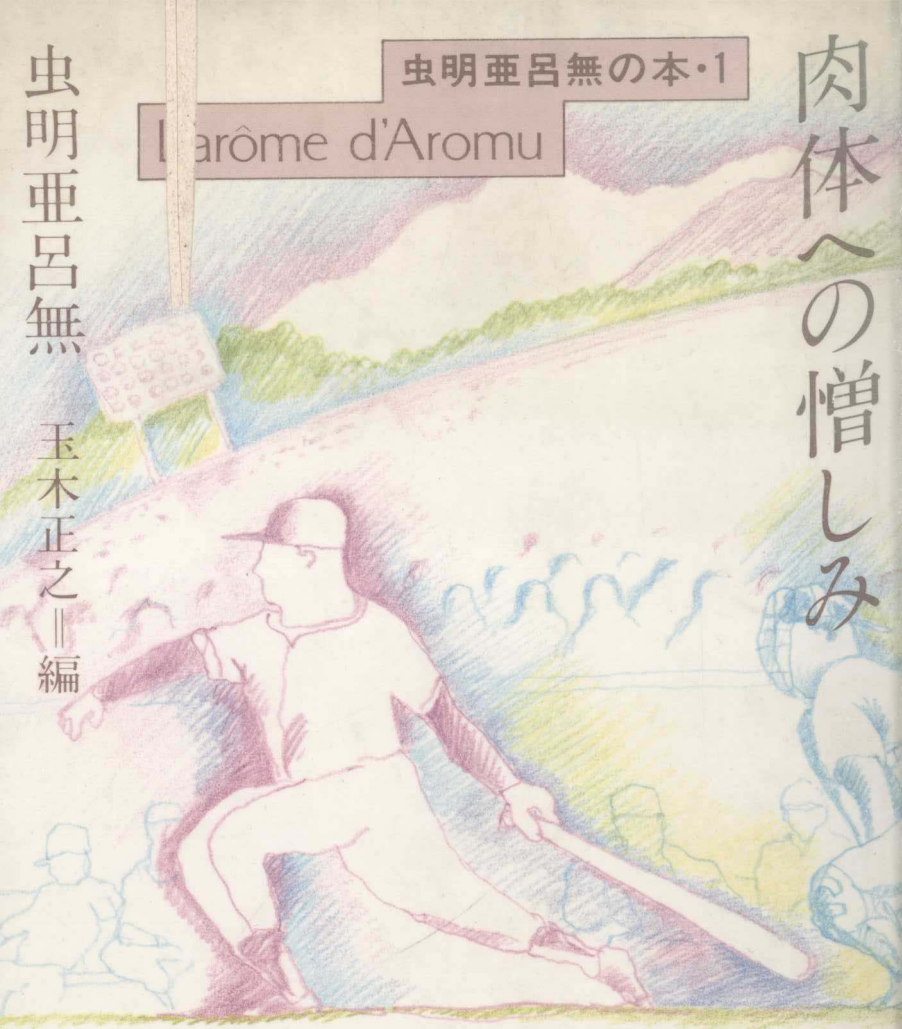
肉体への憎しみ

虫明亜呂無の本・1

L'arôme d'Aromu

虫明亜呂無

玉木正之 編



虫明亜呂無の本・1

肉体への

虫明亜呂無

虫明亜呂無 むしあけ・あろむ

1923年東京生まれ。1946年早稲田大学フランス文学科卒業。作家、評論家。1991年没。

玉木正之 たまき・まさゆき

1952年京都生まれ。東京大学教養学部中退。スポーツライター。

虫明亜呂無の本 L'arôme d'Aromu 1

肉体への憎しみ

1991年7月15日

初版第一刷発行

1991年9月5日

初版第二刷発行

著者 虫明亜呂無

編者 玉木正之

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4 〒111

電話 03-5687-2680 (営業)

03-5687-2670 (編集)

振替 東京6-4123

印刷・製本 中央精版印刷

©1991 Aromu Mushiake Printed in Japan

ISBN4-480-70121-4 C0393

第二章 スポーツ小説の匂い 235

肉体への憎しみ 237

青春とスポーツ 243

第三章 対談 スポーツ・人間・風土 VS 井上ひさし 253

編者あとがき “スポーツそのもの”と“人間ドラマ” 玉木正之 275

肉体への憎しみ 目次

第一章 亜呂無の香り 5

風よりつらき 7

夜明けの豹 47

海の中道 83

ペケレットの夏 121

タンギーの蝶 177

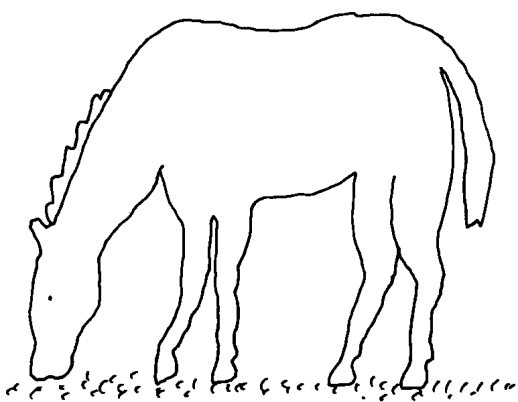
シャガールの馬 201

虫明虫暗無の本 L'arôme d'Aromu 1
肉体への憎しみ

装幀・装画・カット◆和田誠

第一章

亜呂無の香り



風よりつらき

今日、榮治に赤紙がきた。十月一日、津の歩兵連隊に入隊せよという令状だった。三度目の応召である。

昭和十九年九月も、あと二日で終ろうとしていた。

赤紙は薄い紅紫色の紙で、くすんで、毒々しい感じがした。手にふれてはならぬ物とおどけるように、わたしは赤紙をたんすの上に置いた。頬がほてり、息苦しかった。わたしは台所にいき、水道の蛇口に口をつけたまま、水をのんだ。

台所の窓から、隣家の紅葉もみぢが見えた。貧弱な家庭菜園に、紅葉だけが鮮やかに色づいていた。細い幹は灰色をしていた。季節にさがけて、早々と色づく紅葉は、木自身ですでに病んでいる証拠だと聞いたことがある。わたしは不吉なものを目にした、と思った。今

まで、毎日、台所から隣家の庭の紅葉を見つづけてきたのに、なぜ、そのことに気づかなかったのでしょうか。紅葉の背後に、雲ひとつない秋の空がひろがっていた。

居間にもどったわたしは、川西飛行機製作会社の工場で、飛行機の胴体にリベットを打ちこんでいる栄治の姿を想像した。

栄治は今年の一月、東京巨人軍を^{かくしゅ}鹹首されていた。

そのころ、戦力増強に関係のない娯楽は禁止せよ、という政府の命令がだされ、職業野球の選手たちも軍需産業の工員になることになった。阪神、阪急、南海、朝日などの選手たちは、親会社が産業会社であるため、そのまま横すべりに傍系会社で産業戦士になっていればよかったが、新聞社を背景とする巨人軍の選手たちは手続きが面倒だった。巨人軍選手は東芝府中工場に転勤という形式をとられた。もっとも、巨人軍選手のうち十六名がすでに応召し、チーム内にはわずか十二名が残留、それも他球団から配給された選手をいれてのことだった。配給というのは前年の昭和十八年末に解散したふたつのチームの選手を、出征、応召などで人数のすくなくなったチームに分配したわけである。野球ができる時代ではなくなっていた。そんななかで、政府は産業戦士を優遇する意図を誇示するために、残存した六チームを合併して三つのチームに再編成し、試合を許可した。が、それもわずか二カ月の間で停止された。

鹹首を言いわたされたときの栄治の心中は、野球を知らぬわたしにも察するにあまりある。栄治は言いたいことがたくさんあったろうが、持前の恬淡^{てんだん}とした気性と、生来の勝気から、「なぜ？」とは聞きかえさなかった。その場で球団の通告を受けつけたらしかった。

昭和九年、アメリカの職業野球が来日して全日本軍が結成され、栄治はその主戦投手にえらばれ、そのまま巨人軍に入団した。以来、チームにかずかずの貢献をはたし、職業野球の象徴として認められてきたはずだったが、十年勤めた球団からの最後の言葉は、

「君は府中工場へ行く要員に入っていない」

という冷たいものだった。栄治は無用の選手として、体よく路頭にほうりだされたのである。過去の実績も、築きあげた栄光も、すべては葬りさられ、沢村栄治という名前は球団名簿から抹殺された。彼はすでに忘れられた人であった。退職金も慰労金もでなかった。戦局は悪化する一方で、東京は食糧事情がきびしく、またいつ空襲を受けるかわからぬ状態だったので、栄治が鹹首されてから一カ月後、わたしたちは知人のつてを頼って、阪急沿線の花屋敷に移った。栄治が川西に勤めるようになったのは、わたしの女学校時代の友人の夫が、その現場の課長をしていたからだった。

が、栄治はどう思っているように、わたしは毎朝、伊丹の工場へ通っていく栄治を玄関で見送りながら、彼が不安定で、行先の危うい野球の世界を離れ、貧しいが、平凡で、無事

な生活をすごせるようになったことを心中ひそかに喜んだ。工場の給料は乏しく、生活は苦しかったが、わたしは配給の食糧を受けとり、花屋敷の駅近くまでの坂道をくだっていくときなど、早春の田園のにおいの漂う大気を胸いっぱい吸いこみ、まぶしい陽の光を掌でさえぎり、少女時代によく歌った唱歌などを口ずさんだ。

「これまでに二度も出征し、名譽の負傷もしている。今は産業戦士として軍需工場で働いている。よもや、栄治に三度目の応召はありえないだろう」

わたしが、その頃、いちばん真剣に考えていたのは、そのことだった。

が、その「よもや」は、けっして、「よもや」ではなかったのである。

わたしは近くの酒屋にいき、電話をかりた。

栄治は受話器のむこうで、「ほう」と声にもならぬ声をあげた。彼の沈黙の間、彼の背をこえて工場の騒音が流れてきていた。それから、リベットを打ちこむ振動音が伝わってきた。わたしは、その音にあわせて、握りしめている受話器を震わせている自分に気づいた。栄治は心中の動揺をなだめるかのように、

「へっ！」

と、言った。「ついてないな」と、彼はその後、言ったらしかったが、わたしにはよく聞きとれなかった。彼は二度、三度と舌打ちした。

栄治の応召を知って、酒屋の主婦がわたしになにかを言いかけてきたが、わたしはすぐ店を出た。家に帰り、することがいっぱいあるようだったが、なにをしてよいかがいづつかなかった。昭和十六年、わたしは新婚でもないころ、栄治の応召を、すでに経験している。が、あの時も、なにをしてよいかわからなかった。すべてが、あわただしく、うやむやのうちにすぎ去って、わたしたちがほとんど別れの言葉らしい言葉もかわさぬうちに、栄治は入隊していった、ということだけが思いだされた。そして、この場にもぞんでも、そのようなことしか回想されないというのが、わたしには腹だたしかった。

酒屋の主婦が、店を出て数歩したわたしの背に、「応召転出の手続きをとれば、出征軍人用の酒の特配がでるから」と、言った。彼女は用紙の提出は後からでよいと、店の奥から日本酒の瓶をとりだしてきて、わたしにくれた。主婦は瓶を胸にかかえたわたしを憫れみの表情でみつめていた。わたしは、その憫れみの内容に、一瞬、屈辱を覚えた。先に顔を伏せたのは、主婦のほうであった。

翌日の夜、わたしたちは、津の商人宿に泊った。それも、昭和十六年の時と同じだった。宿には栄治とおなじように、翌日、連隊に入営する人たちが家族のものと宿泊していた。廊下をあわただしくゆきかう人たちの足音がたえず、聞こえていた。そのつど、廊下がきしんだ。

わたしたちは持参した配給米を宿屋側にさしだしてあったが、だされた食事は、こんぶや、ひじきを主体にした貧弱なものであった。薄暗い電灯の光がてらしだすので、わたしたちは黙々と箸を口にはこんだ。電灯の光の周囲ははげ落ちた壁と、雑誌の口絵を穴ふさぎに張ったふすまであつた。狭い部屋は湿ったかびのにおいがした。十二時近く、わたしたちは風呂があいたからと、女中に言われた。

浴場は五ワットの裸電球をともした粗末なつくりだった。湯はぬるく、汚れていた。浴場のすみの流し口に女のもつれた髪の毛の束がからまりついていた。

わたしは栄治の背を流した。そのとき、赤紙を受けとってから保ちつづけてきた心の緊張がほぐれて、わたしは、はじめて涙をながした。わたしは、こみあげてくる嗚咽をこらえた。

栄治の背は、これが野球選手のそれかと疑わせるほど薄くなっていた。背だけではなかった。肩も、腰も、足も、肉が目立ってとぼしくなっていた。赤銅色だった皮膚も白ずんでいた。わずかに男性特有の、いかつい、剛直な骨格が頼りに思われるだけであつた。脂のすくない肌のうえを、湯はためらうことなく流れおちていった。わたしは彼が第一回の支那戦線への出征で受けた左手の傷跡を、わたしの頬によせていった。彼は徐州会戦から武漢三鎮の攻略にむかう途中、雨中の大別山の戦闘で、左の掌を機銃弾でうちぬかれた。

わたしは彼の左の掌に唇をあてた。その間、わたしの泪はとまるところがなかった。この男が、明日からは、遠い所へ去って行ってしまおうという思いが、唇をとおして、彼の体温とともに、わたしの中にひろがっていった。彼の肌は、わたしの泪の味がした。

「よし、今度は、おだいが流してやる」

おだいというのは、栄治が自分のことを指している時の言葉だった。宇治山田の言葉らしかった。

栄治はわたしの背後にまわった。

わたしは浴場のタイルの上に片膝をついて、心持ち、彼の胸によりかかるように、背をそらした。彼の流す湯がわたしの肩から胸にかけて落ちていった。わたしは、彼の肩に頭をあずけた。

浴場のせいかな、彼の男はおわなかった。

「なにを泣いてるねん？」

「泣いてへんわ」

彼の言葉で、わたしの感情はたかまっていった。わたしは、湯桶からじかに湯を掬^{すく}って、顔を洗った。手拭で顔をふくと、そのあとから、目のふちに熱いものが溢れてきた。

入営の日、わたしたち見送り人は、早朝から、連隊横の原っぱの一カ所に集められ、憲